高退協ニュース

高知高退協事務局
1996・2・19
No.79

高知県高等学校退職教職員協議会
高知市丸ノ内二丁目一の一〇
教育会館内　高教組気付
TEL　〇八八八―二二―六八二二
振替口座　徳島　五―一一八九三

高教組結成五十周年 高退協結成二十周年 記念行事へのご案内

高知高退協会長　坪井　幹之

激動の戦後を不屈に歩んできた高教組と高退協の運動を振り返り、さらなる飛躍を願って、次のように記念行事と祝賀交流会を開きます。

皆さん方の参加を心からお願いして、ご案内いたします。

とき　三月十日（日）
ところ　教育会館・高知城ホール

展示　一階ロビー（3／10～3／15）
二階展示室（3／10のみ）

○高教組五十年、高退協二十年の歩み展
写真と機関紙で運動を振り返ります。

○美術展
仲間の絵画、陶芸、写真、華、手芸などの創作品を展示、チャリティバザーも行います。

ステージ　一時～四時、四階ホール
和太鼓でオープニング、詩吟や舞踊、劇や歌声など多彩な舞台です。

祝賀交流会　五時～七時半、四階ホール
高教組五十年を振り返る構成劇で幕を開け、記念歌を発表、心ゆくまで祝賀の懇親会を行います。会費五千円。

※準備の都合上、懇親会への参加は3月4日までに、高退協の役員、または高教組（でんわ22―6822）までご連絡ください。なおハガキでのご連絡は
高知市丸ノ内二ノ一ノ一〇
高知高教組気付　高退協　宛

＜広告＞

礼文・利尻　花の旅

1日目　高知空港―稚内空港―稚内港―香深港（礼文島　泊）
2日目　礼文島観光（礼文島　泊）
3日目　礼文島観光（午前中）
香深港―鴛泊港（利尻島　泊）
4日目　利尻島観光（利尻島　泊）
5日目　鴛泊港―稚内港―宗谷岬―サロベツ原野―豊富温泉（豊富温泉　泊）
6日目　豊富温泉―旭川駅―札幌駅―（車中　泊）
7日目　上野駅―東京駅―高知駅

このような旅を計画しました。期日は6月、経費は15万から20万の間です。15名以上の参加があれば実施します。ご希望の方は「山の会」坪井（75―0998）までご連絡下さい。

3月10日は 高知城ホールで再会を

記念行事のオープニングが近づきました。

高教組の前身である中等教組の結成は50年前の3月8日、高退協は20年前の5月1日に結成されました。

昨年、高退協と高教組は両組織の結成記念行事を3月10日に共催で開くことを決め、準備を進めてきました。

この2月1日の第4回実行委員会で記念行事の要領を決め、当日の準備にむかって本格的に動きだしました。

高退協はこの日を、日頃なかなか会う機会のない会員が旧交を暖め、現職を激励する懇親の場にしたいと考えています。

展示では、私たちの来し方を振り返りながら、作品に友の日頃をうかがい、祝宴で旧知を暖められますよう、ぜひご出席ください。

記念誌 「それぞれにこの五十年を…」発刊

一昨年5月に発起人会を開いて以来、10回の編集委員会を経て、記念誌がようやく発刊されました。

論議と時を重ねただけでなく、70人の執筆者をはじめ、制作にかかわった会員は百人に近く、現在までに寄せられたカンパも三十万円をこえ（目標は四十万円）文字通り高退協あげての記念誌になりました。

内容は戦後五十年を迎えた高退協の記念誌にふさわしく、過酷な戦争と激動の戦後を不屈に生きた証言の数かずが胸を打ちます。

この証言集が多くの人びとに読まれ、21世紀を拓く糧としてもらいたいものです。ぜひ友人、知人におすすめください。

（頒価は千円、注文は高退協事務局までご連絡ください。）

草声老語

高退協二十周年の記念誌ができた。戦争に青春を奪われ「それぞれに、この五十年」を懸命に生きた世代の証言集である。

あの人がこんな思いで頑張ってきたのかと、改めて当時を回想して懐かしい。

なかでも過酷な戦中体験を、昨日あったことのように語りながら、戦争の非人間性を告発する気迫が胸を打つ。この気迫こそ、戦後五十年を権力と不屈にたたかい、青春を再び戦火にさらしてはならないという想いを、一筋に貫いてきた高教組運動の原動力であろう。

しかし学校はいま、まるで砂漠のようでもあり、もうひとつの戦場にも似てきた。

俗物が権力におもねって、学校を踏み台に栄達を夢見る一方で、子どもたちは傷つき、学校を拒否し、命をも断つ。

北海道の高校では、空出張で一億余円を捻出、道教委にみついで官官接待の財源にしたというから、腐敗は庶民の想像をこえる。しかも社会党知事のもとでのこと、迷走して解党するのも不思議ではない。

敗戦直後、高知の教員連盟結成の綱領案は教育の再生をめざし、「学校教育行政ノ民主化」をかかげた。いわく

「1、教育者ニヨル教権ノ確立
2、教育界ノ浄化
イ　非科学主義、軍国主義、形式主義…ノ一掃
ロ　教授能力向上ニ熱意ナキ者ノ退職」

そして県民への「学校教育ノ全面的開放」をあげた。

その理念は迷走することなく高教組運動に受け継がれ、いまもってその光を失わない。

きたる三月十日は、この高教組五十年の歩みを、次なる飛躍につなげる祝杯を、多くの仲間と交わしたいものである。（チ）

「泰泉寺日記」抄

坪井　幹之

一月

［五日］高退協・「山の会」共催の形で「新年の集い」。伊野町に三十九名勢揃い。まずは、ハイキング。仏ガ峠に登り神谷に下る。六時間の行程。ついで、鹿敷の「和紙工芸村」で入浴、新年宴会。座興として「山の会」三賞を発表。来年の当番を南国と布師田地区にお願いする。今年、「お当家」にあたられた伊野町のみなさん、ご苦労様でした。

［六日］記念事業実行委員会に出席。事前に会合を持った各部門より進捗状況の報告を受け協議。次回は二月一日。

［十二日］「老泳会」三人で初泳ぎ。渇水のため十六日よりプール閉鎖とのこと。雨、降れ、降れを願う。

12・8行動

☆浅利香津代さんの朗読に感動

☆憲法会議の結成レセプションも

昨年12月8日、太平洋戦争開戦の日に、平和を守る行動が集中的に行われました。まず早朝には県庁前で、午後にはグリーンロードで「赤紙」くばりなど街頭宣伝が、母連と憲法会議に結集する多くの人々によって行われ、人目を引きました。

夕方6時からは、高知城ホールで「12・8平和の集い」が開かれ、高退協も参加して、平和への決意を新たにしました。主催者を代表して母連の鍋島啓子会長が挨拶し、そのあと高校生の胡摩崎さくらさんが沖縄行動の感動的な報告をしました。

この夜のメインは女優浅利香津代さんによる「ひと夏の少年兵」（松吉千津子作）の朗読でした。敗戦の夏、作者の家に民宿した浦戸海軍航空隊の予科練の少年兵40人を見守る老婆の一人語りを、浅利さんは見事な土佐弁で演じました。

その後、同じ会場で、先に結成された高知県憲法会議の「結成レセプション」が開かれ、オール与党体制で憲法改悪を企む動きを許さない決意を固めました。

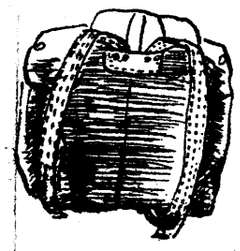
［十九日］一時より記念誌の再校、続いて編集委員会。最終的な打合せのあと、「竜馬茶屋」で打ち上げの宴。

［二十一日］展示即売の「第8回我楽苦多市」を開く。今回も多数の方のご来駕を頂き、励ましを受ける。

［二十二日］高退協事務局会議。今年度の行事・事業への参加状況を集約。参加率五〇％というところか。最後にニュースの編集で閉会。

二月

［四日］「山の会」二十名で虚空蔵山に登る。幸いにも寒気去り、「立春」らしき日となる。斗賀野駅出発、二時間少々で山頂へ。北の石鎚は積雪、南の横波三里は春の気配。昼食、記念撮影を済ませて、戸波の家俊に無事下山。来月は五在所山。昼食時に豚汁の予定。



望年会にぎやかに

――40名の参加で――

去る12月15日、高退協の望年会が高知城ホールで開かれました。会場は洋間、丸テーブルで結婚式のような華やかな雰囲気です。

5時開宴、先ず当日誕生日を迎えられた浜田節子さんに若き男性より小さな花束贈呈。乾杯後、福引き、そして野島幸代さんの日本舞踊を皮切りに余興の始まりはじまり。

手品は池上寿雄さん、盛んなヤジの飛ぶ中三枚のハンカチーフが目の前でアッという間にひとつの輪になって、拍手喝采。女性手品師は加藤敏恵さん。ロングドレスで軽快な音楽にのって、シルクハットから次々と出るはでるは。皆盃をもつ手もしばしお休み。次は浪曲。研修旅行で披露され、再演の要望が強かった川谷和男さんの森の石松。もう会場は湧きに湧きました。

又、竹村義典さんによる鉄道唱歌（窪川から後免）は、皆をなつかしい気分にさせてくれました。そしてカラオケが始まり、あちこちのテーブルでの声も高まり大宴会です。

ミャンマー慰霊巡拝の旅 一

古味　忠男

戦後五十年が過ぎ、戦争の風化が進むなか、父の終焉の地ビルマ（ミャンマー）を訪ね、今一度「この戦争の意味を問いただすのも又意義があると思い「高知県ミャンマー慰霊巡拝団」（一月十六日～二十七日）に参加した。高知パゴダ会主催の今回のツアーのメンバーは戦友（家族）十一、遺族十三、添乗員一名の構成であった。厳寒の関空に冬着を預け、機上の人となり約七時間、バンコク経由でヤンゴン入り、二時間半の時差にぼけるひまなく常夏の国へ降り立った。すっかり日が暮れた空港を出ると所どころ暗闇に銃を持つ若い兵士（射撃のポーズで）、今更ながらこの国が軍政下にあることを改めて認識した。

一夜明けるとホテルの前庭にはハイビスカス、ブーゲンビリヤを始め色彩やかな花が咲き乱れ、やしの木や名を知らぬ大木が生い茂り、大小の鳥がにぎやかに飛び交う様は正に南国の楽園、とても暦の上で正月とは思えない異国情緒である。

出発前の旅行必需品のリストに洗面器、パジャマ、サンダル、水筒、洗剤、ハンガー、電池、蚊取線香があって大変な旅だと聞いていたが、実際ホテル（日本人用は最高級）でシャワーが急に冷たくなったり、手洗いに湯がなかったり、便器がうまく流れなかったり、突然停電になって戸惑ったり、貴重な体験をした。TV冷蔵庫が備わっているのは半分位。市中には馬車、輪タク（三人乗り）、車が同居、戦前と現代の同時進行で、日本の中古車のオンパレード、パブリカ、三輪車のミゼットが現役で活躍中といえば大体の想像がつくと思う。大小のトラックに屋根をつけ、さらにその上に手すりをつけて荷物や人（老若男女、子供まで）が文字通り鈴なりに群がっている様は驚きを超して壮観と言うべきだろう。日本語は通じなくても「トヨタ」「ニッサン」は国際語で日本車は丈夫で大変評判がいいらしい。人々は男女共ロンジースタイルでサンダル履き（都市でも）、農村部では子供のハダシが多い。今は乾期（十月～四月）で日中は三十度を超すこともあるが夜間は十度位に下がることもある。朝夕は大変すがすがしく湿気が少ないせいか日本程暑く感じない。

7時30分、突然我らが山原健二郎さんの登場です。この日国会は最終日のため望年会は欠席との話だったのでびっくり。空港からそのままかけつけてくれたのです。さあ又乾杯です。そして浜田昌俊さんが山原さんへの想いを語り始め、つぎつぎと多くの方々が暖かいメッセージを山原さんに贈りました。

8時20分いよいよクライマックス。みんなで肩をくみ大きな輪になって“がんばろう”本当に仲間であることの幸せを感じながら楽しく歌い、こぶしをつき上げたのでした。

初めての参加で、それも係ということで、少し不安もありましたが、始まってみると、楽しい雰囲気にのまれました。なつかしい方々のお顔も拝見できて本当に幸せなひとときでした。

さあ次は3月10日の記念祝賀会です。宴会係としては望年会を大きくうわまわるご参加を、ぜひぜひお願い致します。あなたの参加をお待ちしております。

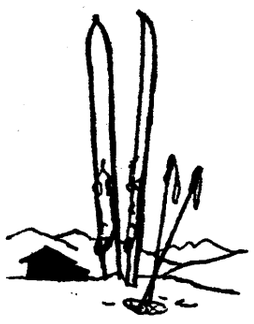
（溝　渕）

退職予定者学習会開く

2月7日恒例の学習会が高知城ホールで開かれました。

今年の退職予定者は13名で、うち10名が出席、退職後のさまざまな課題で学習を深めました。

高退協からは岡崎副会長が出席、高退協の活動を紹介して加入を呼びかけました。



老・眼・鏡

紹介「パソコンをどう使うか ―活字から電子メディアへ」

（諏訪邦夫著　中公新書・1995年）

好むと好まざるとにかかわらず、コンピューターなしには動かない現代社会。そこでパソコン「超初心者」の筆者がいまブームの「ウインドウズ95」に入門し、ネットワーク通信も始めた。同時に指南書をあさる中でこの本を手にした。

本書は一般のパソコン解説書とは異なり、機器の構造や動き方を書いた本ではない。著者は大学の勤務医。研究の一環として長年パソコンを使ってきた経験と認識を通して、さまざまな知的作業にパソコンがどう役立つかを述べている。

まず、「パソコンは書斎である」と著者は言う。大きな机、大量の本、部屋といった物理的空間は高価。パソコンのハードデスクには新書判の本で二千冊分入り検索自由、移動自由。手紙や日誌の保存や検索も自在。ハードディスクがつかず互換性のないワープロでは書斎にならないというわけだ。

次に、「一台目はノート型を」という。いまでは高性能、電池が強力、携帯して書斎の役が十分に果たせるから。そして液晶の評価が安定していないカラーよりも白黒を著者は勧める。買って有効に使うには訓練と知識が必要で、その要素はキーボードとタイプ練習、ソフトの勉強、辞書を鍛える、の三つだという。

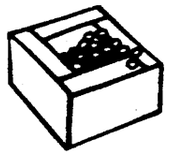
文章や図形を書く、計算する、通信する、翻訳する、等からの発展として「マルチメディアパソコン」について著者は語る。パソコンで小説を読む（アンデルセン、論語、シェクスピア等の入ったCD―ROM（英文）がすでにあるとか）、パソコンに喋らせる、音楽を聴く、名画鑑賞、電子ブックなど…。しかし誘惑に負けず、使う意志と使わない意志の大切さを著者は訴えている。

さて、兎小屋に住む筆者はノート型“書斎”で外国語を学ぶ目的なのだが、果たしてまにあうことやら…。

（Y・K）

健康手帳

T・N生



「不整脈が正常に」

野ブドウは、マッチの頭くらいの青い実がつく、川縁に多く、山にもある。つる（幹）を煎じて飲むと、心臓の弱い人が元気になる。また神経痛・胃潰瘍・糖尿病・更年期障害・関節痛・不眠症など三十数病に効果がある。

「活用法」

野ブドウのつる（幹）は、五センチぐらいに刻み乾燥させる、急ぐときには、生のままで用いる。ブドウだけでもよいが、乾燥させたドクダミを一、二センチに刻み、ブドウ五に対しドクダミ三の割合でよく混ぜる方法もある。甘草を少し入れたら飲みやすい。煎じ方は、乾燥したものでも、生のものでも一握り位を、ガーゼかさらしの袋に入れ、必ず土瓶（金属はだめ）で煎じる。土瓶にいっぱいの水が、およそ半分になるまで煮詰めたら、もう一度水を入れ、いっぱいにして、それがまた半分になるくらいまで煮詰める。一回きりでなく、二、三回色がでるうちは効果がある。煎じあがったら布で濾して瓶に入れ冷蔵庫で保存する。飲用法は、寝る前に小さめのコップ一杯位を毎日飲む、飲んだ後、眠気がさすことがあるので、車を運転すること。寝る前に飲むのが一番効果がある。

研究会のご案内

テーマ「安保・沖縄問題」

2月24日（土）2時　ムトー荘

参加料　500円（会場費として）

＝主催・高退協読書会＝

会員消息

池本文雄先生をお訪ねして

去る一月二十三日の午後先生宅にお伺いしました。昨年入院されていたときは車椅子での生活でしたが、いまは自力で足取りもたしかに玄関までお迎え下さいました。外には出られてないとのことですが、本当にお元気で血色もよくスマートなロマンスグレーのにこやかな笑顔は昔のままでした。

話はもっぱら昔話、つき合った同僚の先生方とのエピソードや失敗談、「お酒もよう呑んだ」ことなど話はつきません。

池には二匹の鯉が寄り添って泳いでいます。「サギが来て小さい鯉を食べてしまう」そうです。そう言えば山鳩も時々水を呑みにきています。

ご子息二人とも県外に居られ、今はこうした静かなお住まいにご夫婦でお過ごしのようです。

二校長を偲ぶ会開く

一月六日午后一時から、高知城ホール四階に約百名の仲間が集まり、五年に一度の恒例の行事となっている、故人となられた勤評不提出校長先生を「偲ぶ会」が盛大に行なわれました。今回の該当者は、池敬亀（高岡）、谷賢（幡多）の両校長先生でした。

主催団体（県教組、勤評の会、退教協、退婦教、高退協）を代表し、退婦教の川村会長が開会挨拶。全員で「緑の山河」を斉唱したあと黙祷しました。

経過報告、献花と進行。山原代議士と国松県教組委員長が二校長を偲ぶ言葉を述べた後、堀内仁蔵（高岡教組）と野村隆一（幡多教組）の二人から故人の思い出が語られました。

土田弁護士の来賓挨拶、遺族代表として谷氏から挨拶を受けた後、儀式は終了。

直ちにその場で、懇親会に移り、久しぶりに会った昔の教員仲間が、勤評闘争の思い出や、近況報告、山原十選に向け頑張ろう等、楽しい雰囲気のうちに全日程を終了しました。

二時間くらいでおいとましました。「又来てよ」「毎日暇が一ぱいあるきネエ」……とのことでした。又お訪ねします、それまでどうかお元気で。

（窪田和子　記）

訃報

片岡文雄先生は、昨年十二月上旬、脳腫瘍で入院、約九時間の手術を受けられましたが、経過は良好で、一週間ほどで退院。現在は自宅から通院療養中です。

一月二十三日お見舞いに伺ったところ、お元気で約二十分くらい、病状等についてお話してくれました。脳波の異常はなく一安心とのことでした。全快を祈って報告とします。

訃報

会員の上原　傑先生が一月十九日に死去されました。

ご冥福を心からお祈り申し上げます。

中内光昭先生出版祝賀会

二月八日午后六時半から、ラ・ヴィータの八階で、前高知大学長の中内光昭氏の出版祝賀会が六十名の関係者を集めてもたれました。

岡林清水氏など三名が祝辞を述べた後、ヴァイオリンとピアノのコンサートがありました。中内先生からの謝辞、友人として、安芸長洋、浜田隆史先生が中内先生のエピソードを披露するなど、なごやかな出版祝賀会となりました。なお、著書は随筆集で大変読みやすく好評です。「“海の忍者”はだまされやすい」南の風社（二千円）、一読をお奨めします。

1995年度 高教組退職者名簿 から

1.	中 芸	千光士 温	（教 諭）	（英）
2.	山 田	阿部 勝好	（教 諭）	（理）
3.	北 通	松尾 達恵	（教 諭）	（理）
4.	高 工	田所 金久	（教 諭）	（社）
5.	高工定	井上 徳治	（教 諭）	（数）
6.	市 商	横川 哲郎	（教 諭）	（商）
7.	子 鹿	島山 雅恵	（教 諭）	（小）
8.	宇 佐	安並千代美	（教 諭）	（理）
9.	伊 商	中川 正路	（教 諭）	（商）
10.	伊 商	池田 亀吉	（主 監）	（事）
11.	須 崎	西森 実男	（教 諭）	（体）
12.	盲	西田 令子	（主 監）	（事）
13.	伊 商	今井 儀一	（現 業）	

高教組だより

学校行ったらホッコになる

梅原 憲作

いささかショッキングな言葉を聞いた。この2月10～11日、徳島市で行われた四国民研（四県国民教育研究所の交流集会）での席で聞いた言葉である。この会は年一回、11年目であるが徳島で開かれ、徳島の先生が出席するのは初めてであり、今回の「高教組だより」には四国の教育事情レポートの意見もきかずに「観点別テスト」実施を決めた。県下一律一年生に七五〇円負担させるもので、一回のテストで生徒の評価を固定するものである。

香川県ほど画一テストの好きな県はない。かつて学力テスト日本一を愛媛と競い合い、その王冠を得たことは私たちの世代の記憶にある。中学校校長会は現場テスト」一律一年生に七五〇円負担させるもので、一回のテストで生徒の評価を固定するものである。

他に、校長会が権力をもち、修学旅行、テスト、運動会、研究指定校などすべて決定し学校に押しつけてくる。95年4月、香教組はこの二点を校長会に申し入れ前者は中止、後者は検討を約束させた。

徳島では学校長の権力が絶大だけでなく、係校長が個別事項に指導・監督の権限をもつ。たとえば給食係校長は行政単位で各校の給食の指導監督を行い、退職すれば「給食かい」に天下る。又教科×500円×児童数の莫大なワークブックの収入がある。五年前大規模な教育汚職が発覚した。

七年前にできた全教に連帯する「子どもと教育・くらしを守る徳島県教職員の会」が県下初めての白書運動に取り組み、壊滅状態の日教組に代わり「一会」は徳島市内A小学校では二年がかりで父母と共同して制服を私服にすることができ、学校行事から日の丸掲揚を中止させ、父母が中心となって学級通信の発行など学校再生の新しい芽が出始めている。

愛媛では一月二十五日、八幡浜市の二五〇名規模の田舎の純朴と思われていた松柏中で二年の女生徒が男生徒たちの言葉のいじめを苦に自殺した。「非行も少なくおとなしい学校」と言われていただけに県教育界に大きなショックを与えている。引き続き男生徒による千二百万円の遺産相続に対する恐喝事件も発生した。

この三県は、時期の早い遅いはあるが、権力によって教組がズタズタに分断されたことである。この原因は、戦後の教育の民主的改革の「帝国教育会」が「天皇」と「教育勅語」を除いただけの「教育会」とし育の反動期に蘇生させたところに共通点がある。

だが、「どっこい生きている」新しい芽生えもある。香川では「学校へ行ったらホッコ（アホ）になる」。と言われるなかで、退職教職員たちによってお母さんの要求をもとに教育相談活動、教育実践のサポート、登校拒否の子どもたちの居場所づくり、何よりも父親の参加が特徴だという。この運動が行政も認めるところになっている。

愛媛では、コープえひめや、子ども劇場の親たちがここ十年来地味に勉強会を開きながら、暴力事件やいじめの背景にある日常性に対し、「こんな先生では困る」「こんなことは許せない」と学校に具体的変革をせまっている。

いずれの報告のなかにも退職教職員の地域での果す役割が言外にあった。

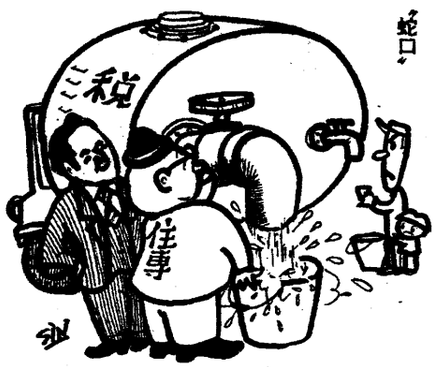
高教組の情報から

対話と共同で学校づくりを

室戸高校総合学科導入をめぐる問題で、お母さん方が自分達で独自のチラシや資料をつくり、署名用紙をもって地域を網の目のように回り、その力は一〇〇〇筆を超える署名数となって現われました。

室戸の子どもたちに主権者としての教養や科学技術や文化を身につけることを保障する高校教育の実現を求めて、父母住民が協力・共同して、学校を地域に引き戻しました。

ここに学校づくりをすすめていく原動力があります。政府財界が押し進めようとする学校再編ではなく、二一世紀を担う主権者を育てる学校づくりを父母住民と共同してすすめることが求められています。



相撲三二知識 十三

林 勤

◎はじめに

就職場所とも言われる三月場所が近付いているので、現在連載中の「親方金言集」を一時中断して「力士の入門」について少し述べることにした。

力士の入門（1）

◎就職場所

三月は学校卒業期であり、一年六場所の中で力士入門者がいちばん多いので、就職場所とも言われている。土佐ノ海も二年前の三月場所に入門している。

次の表を見ると、三月場所の入門者が断然多く、就職場所と言われることが証明されている。

	入門者が一番多い場所	二番目	他の四場所の合計
平成六年	三月場所 一〇七人（一）	一月場所 二四人（五）	二九人（〇）
平成七年	三月場所 九二人（二）	一月場所 十五人（二）	四十人（二）

※（　）は内数で大学卒業前に入門したものであり、三月入門学生と同学年である。

今年一月場所の入門者は十三名であるが、その中には、本年度学生横綱柳川（高知工ー日大）、前年度学生横綱後藤（拓大）ら、学生相撲のトップクラス四人がいる。この四者に一歩も譲らない実力者出島（中大）は三月場所に入門するそうである。さて、三月場所には何人入門するであろうか。

最近は学生出身力士が多くなったので、次回はそれについて述べさせていただく。